

## 開会挨拶

田畑理一

ただいまご紹介にあずかりました本学大学院経済学研究科長の田畑でございます。本日はご多用中のところ、多数ご出席いただきまして本当にありがとうございます。

さて、今回の国際シンポジウムのテーマは「アジアにおける地域統合の可能性」を検討することです。その際、地域統合の例として、これまで最も進んでおり、また最も成功裏に形成されてきた統合体であるEUの先例を参考としながら、アジア地域統合の可能性をできるだけ多面的に検討することを目的としております。本シンポジウム開催の趣旨説明は、本大会実行委員長である山下教授が私の挨拶のすぐあとで行われますので、私はロシアおよび中東欧経済の研究をしておりますから、私なりの立場から一言、EC、EUの歴史的な意義について申し述べておきたいと思っております。

若い人々にとっては、今や歴史的な過去となってしまったかもしれませんが、1989年11月9日にベルリンの壁が解体され、ソ連の東欧支配が瓦解し、さらにその3年後にはソ連自体が崩壊してしまったことは周知のとおりです。そして、このソ連崩壊の主要なファクターの一つがECの発展であったということです。すなわち、第二次世界大戦後、ソ連に「拉致」されていた東欧諸国が、ソ連の支配からの脱出を最終的に達成したのがソ連の東欧支配の終焉であったといえると思っております。東欧諸国にとってはその当時、ソ連の支配から逃れたあとの受け皿として発展しつつあったECが厳然として存在していただろうということです。さらに言えば、東欧諸国の国民にとってはソ連から逃れて、ヨーロッパに回帰するという心理が作用していたのだと私は確信しております。このことを象徴しているのが、1991年12月の出来事です。

すなわち、ソ連崩壊とECのEUへの発展とが奇しくも同じ1991年12月、これはEUにおいてはマーストリヒト会議ですが、ソ連においては12月のソ連の崩壊、CISの結成です。本シンポジウムの挨拶としては、私の思い入れに深入りしすぎたかもしれませんが、私はやはりEUの発展というのは単なる経済統合ではなかったということを指摘しておきたいと思うわけです。

他方で、アジアもEU以上にはるかに多くの多様性を抱えております。例えば、インドネシアという一つの国をとってみても300以上の言語があります。宗教的にも非常に多様

です。そのようなアジアの多様性、文化的・政治・経済的多様性を考えますと、それほど簡単ではないと思いますけれども、このシンポジウムにおいてはEUの発展の事実を参照しながら、アジアの地域統合について多面的に議論し、その可能性について展望してみたいと考えるわけです。そしてそれが単純なことでないことは想像できますけれども、だからこそ大胆な歴史的な仮説も含めまして、さまざまな議論を披歴していただきたいと発言者の方にはそのようにお願いする次第です。

本シンポジウムに対して大きな援助を惜しまれなかった駐日欧州委員会代表部に改めて深く感謝しますとともに、本シンポジウムの成功を祈念したいと思います。ご清聴ありがとうございました。